

# 昇降機やリフトなど福祉機器の活用で、ひとりでも暮らしやすく

体が不自由だからといっても、ひとり暮らしができないわけではありません。

電気錠付きのドア、車いす昇降機、天井リフトに高機能の車いすなど、福祉機器を

あますところなく活用し、さらにヘルパーや近所の方の力を借りることでひとり暮らしを続け、

常に前向きな姿勢で毎日を送っている塚本喜英さんのお宅を拝見しました。

取材／文 ● 小山朝子 写真 ● 大関清貴



▲施工者の阿部氏、友人の牧田さん、ヘルパーの剣持さん（右）と

## データ

工事費 ● 約930万円  
天井リフトなどの  
福祉機器 ● 約350万円

## 塚本喜英さん宅

東京都豊島区  
家族構成 塚本喜英さん  
施工 AB企画開発株式会社

## 住宅改修と福祉機器のおかげで ひとり暮らしを実現

塚本さんは95年の3月に車にはねられる事故に遭遇。事故の後遺症で首から下がまひして動けない状態となりました。

その後、機能回復の訓練を行うために入院。その間、自宅へ戻るにあたっての住宅改修が進められることになりました。

リフォーム業者は塚本さんのご近所で、かねてから顔見知りだったという、AB企画開発（株）の阿部常夫さんに依頼することに。

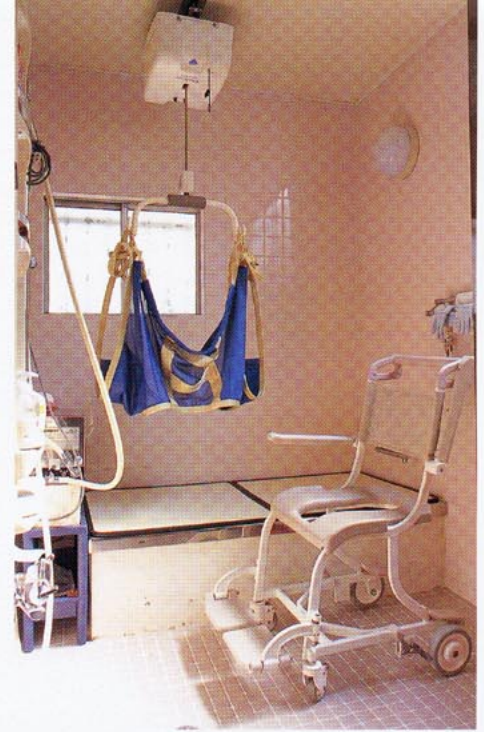
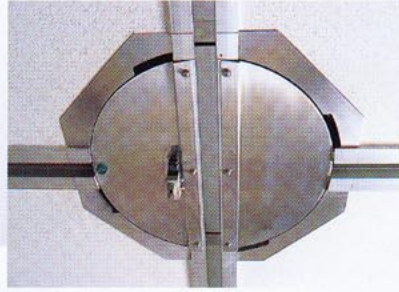
工事に着手することになった95年当時は、現在のように介護住宅のノウハウが少なかったため、依頼された阿部さんも四苦八苦されたとか。「我が家のリフォームで、阿部さんもだいたい自宅改修のお勉強をされたのではないかと思えます」と喜英さんは笑います。

かつては、自宅で薬局を営んでいたため、手前が店舗になっており、店舗の奥に喜英さんの生活する住居スペースがありました。



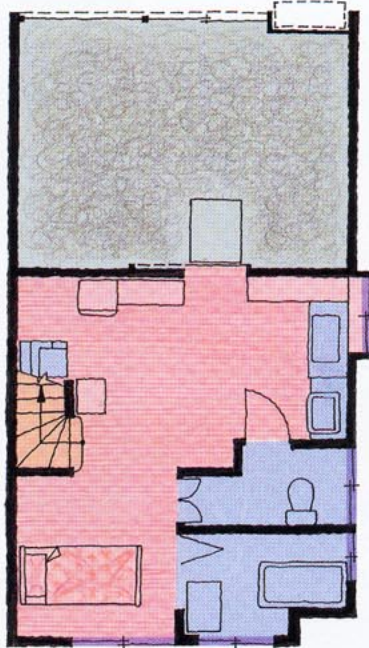
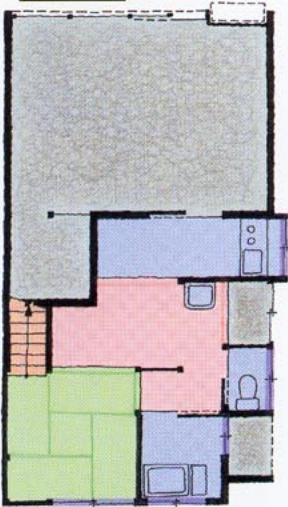


◀◀「この動き、初めて見ると感  
激するわよ」と、天井の交差レ  
ールを話題にする喜英さん。トイレ、  
寝室、浴室の移動が思いのまま



▲リフトのおかげでリモコン操作ひとつ  
で湯船に。以前より浴槽も広々

**改造前**



**改造後**



▲車いすに乗ったまま使えるキッチンと洗面所。  
レバー式になっている水栓にも注目

リフォーム後は、店舗だったスペースの入口  
を引き戸に変え、喜英さんが奥の室内から、フ  
ツと息を吹きかけるだけで開閉できる電気錠を  
とりつけています。

店舗から住居スペースに移る際のやや高めの  
上がり框には、200キロの重量まで対応でき  
る段差解消機を設置しました。

さらに、住居スペースに目を移すと、ダイニ  
ングキッチンの奥にあった和室をフローリング  
にして寝室とし、寝室に隣接する浴室も面積を  
広くしました。これまで浴室の奥にあった倉庫  
を取り壊し、空いたスペースを浴室として拡大  
したので。

こうした室内の改造に加えて、特筆すべきは、  
天井に張り巡らしたレールに吊るしたリフト。  
これはトイレから寝室、さらに寝室から浴室へ  
と移動することができます。

「寝室と浴室が隣接している間取りは、とて  
も便利です。お風呂に入るときは、ベッドで服  
を脱いで、そのままリフトに乗って浴室まで移  
動し、さらにリフトから下りることなく、湯船  
にまでつかれます。介助するヘルパーさんの労  
力も、このリフトのおかげで、だいぶ軽減され  
ていると思いますよ」と喜英さん。

さらに、ダイニングキッチンと寝室には床暖  
房が設置されています。

「このリフォームは、私が入院中に息子や阿  
部さんたちとのやりとりで完成したのです。私  
が口を出していれば、床暖房なんて贅沢はしな  
かったと思いますね」と、厳しい発言をする喜  
英さん。とはいえ、ご本人の機能に応じて改修  
されたこの部屋を、車いすですべて自由に移動する喜





◀車いすのまま室内外へ移動できる段差解消機。設置できるのはスペースにゆとりがあればこそ

▶息をフツと吹けば親しい人に連絡が。使いやすいよう吹き口をストローで延長



## リフォームのここがポイント

PTとの話し合いで本人の機能に見合った改修を  
AB企画開発(株) 阿部常夫氏

塚本さんが入院をしている最中に工事に着手することになったので、ご本人の体の状態や機能を知るため、またどんな改修をすれば塚本さんが暮らしやすい環境になるのかを考えるために、塚本さんが入院している病院まで出向き、理学療法士(PT)の方に相談にのってもらいました。

今でこそ、昇降機やリフトなどの福祉機器やバリアフリー住宅のための建築材料などが揃っていますが、95年当時は「介護住宅」という言葉すらまだあまり聞かれない時代でしたので、あちらこちらから材料や部品などを取り寄せ、試行錯誤しながら完成させました。

これからの住宅改修は、電気錠付きのドア、車いす用の昇降機、そして天井のリフトといった高性能の福祉機器をうまく取り入れて、いかに生活しやすい場所を提供するかということも課題になると思います。



▲入り口の電気錠も室内の装置に息を吹きかけるだけで、自動的に開閉

も「ここまでこれるとは思っていなかった」というほど、手先などもよく動くようになりました。「息子が私の犠牲になるのは嫌だと思っていたのですが、私がこうした体になってから結婚したんですね。それが嬉しかった」という喜英さんに、息子さん思いの母親としての顔を垣間見た気がしました。

周囲の人の支えとリハビリの努力で、ご本人も「ここまでこれるとは思っていなかった」というほど、手先などもよく動くようになりました。「息子が私の犠牲になるのは嫌だと思っていたのですが、私がこうした体になってから結婚したんですね。それが嬉しかった」という喜英さんに、息子さん思いの母親としての顔を垣間見た気がしました。

「私が58歳でケアマネジャーの資格をとったのは、事故にあい、こうした体になってからのことです。この間も、英検の2級に合格しました。生きているうちに、いろいろなことに挑戦したい。体が不自由になったことで、そう考えられるようになったんです」

喜英さんが障害のある体でもひとり暮らしを実現させているのは、住宅の改修や福祉機器のおかげだけではありません。ヘルパーさんや近所の人たちの温かな心が喜英さんの大きな支えとなっています。

## 温かな周囲の支えで 前向きな暮らしを

積極的といえば、喜英さんの生き方自体も常に前向きです。

「私が58歳でケアマネジャーの資格をとったのは、事故にあい、こうした体になってからのことです。この間も、英検の2級に合格しました。生きているうちに、いろいろなことに挑戦したい。体が不自由になったことで、そう考えられるようになったんです」

喜英さんが障害のある体でもひとり暮らしを実現させているのは、住宅の改修や福祉機器のおかげだけではありません。ヘルパーさんや近所の人たちの温かな心が喜英さんの大きな支えとなっています。

「車いすといえば、この車いすを作っているメーカーは利用者のニーズに合わせて改造してくれるんです。これも通常の車いすよりコンパクトですし、座面も低くなっているんですよ」と喜英さんは言います。こうした情報を積極的に取り入れる姿勢は、大いに見習いたいもの。